

教宣 せぶん

汗の成分

涙や汗にはいくつかの種類があります。涙には、嬉しい時に出る涙、悔しい時に出る涙、悲しい時に出る涙などがありますし、汗にも体温調整のために出る汗もあれば、緊張した時に出る汗や、冷や汗などがあります。いつになるかはわかりませんが、汗を流すことを惜しまず、最後には嬉し涙を流せればと思います。

さて、「便宜供与」に対する都労委の第2回審問については、追ってどぶいたニュースで報告があると思いますが、会社側証人に対する組合側弁護士の反対尋問は鋭いものでした。最初に行なわれた会社側弁護士の主尋問では冷静に受け答えしていた証人でしたが、反対尋問に入ってしばらくすると明らかに声が小さくなり、汗をふく回数が増えました。声が小さくなる場面は答えに自信がないことがわかりますし、汗を抑えられない場面は、冷静に答えられない何かがあると感じてしまいました。

組合側弁護士の反対尋問で、全損保から組織として脱退したという契従労が、同日、中央経営協議会を会社と開いた経緯を質す場面がありました。経協の開催を申し入れて、同じ日に社長以下の役員が少なくとも3名も出席できるほど、日本の企業の役員は暇ではないはずで、ここには労使一体となって合併新会社に全損保を入れさせないという意志が働いていることは明白で、その労使の意志こそ、東海経営の差し金・思惑だったことは火を見るより明らかです。証人は、この質問には最終的に「日勤社時代のことなのでわからない」と逃げましたが、この場面で最も汗が出ていたと感じました。

もちろん、傍聴席のほとんどは私たちのたたかいを支援する人たちで埋め尽くされています。その人たちの鋭い視線が一斉に会社側証人に向けられるわけですから、証人が冷静に振る舞えなくても、また極度に緊張しても無理ありません。例えるなら札幌ドームで日本ハムを相手にマウンドに立つ投手のような心境なのかもしれません。しかし、東京海上の「人事」と言えば、縁故採用は一切行なわない、人事にもまったく手心を加えない、役員の圧力さえ跳ね返すと言われている、日本の企業の中でも有名な、毅然とした部署だという評価を耳にします。自分のやった仕事に一点の曇りもない自信があれば、札幌ドームであろうが、甲子園であろうが、都労委であろうが、あんなに汗は出ないと思いますし、もっと大きな声で受け答えができたと思います。